

を覚えていてじんじんと疼くような気さえした。彼はそんな私の様子を、楽しむように見下ろしている。その紅い瞳には、先ほどまでの冷たさの代わりに熱を帯びた、別の感情が灯っているように見えた。それが何なのか、この時の私にはまだわからなかった。

第二章 夜の教え

あの口づけの後、私は再びセレスティアに連れられて客室へと戻された。夕食は部屋に運ばれ、一人で食べるように言われた。豪華な料理が並べられていたが、喉を通る気がしなかった。頭の中はあの玉座の間での出来事でいっぱいだった。唇に残る彼の感触が、どうしても消えない。彼はなぜあんなことをしたのだろうか。生贄に対する、ただの気まぐれだろうか。それとも何か別の意味があるのだろうか。考えれば考えるほど、胸がざわついて落ち着かない。私は結局、料理にはほとんど手をつけられないまま夜を迎えた。

夜が更け、城の中が静寂に包まれた頃部屋の扉がノックされた。心臓が飛び跳ねる。こんな時間に、誰が来るというのだろうか。恐る恐る扉を開けると、そこにはセレスティアが立っていた。彼女は無表情で、淡々とした口調で告げた。

「リリアーナ様、陛下がお呼びです。私の後についてきてください」

「こんな夜に、ですか？」

「はい。お着替えの必要はありません。そのままの姿でお越しください」

私は寝間着の上に羽織るものを手に取り彼女の後を追った。昼間とは違う道を通り、さらに城の奥へと進んでいく。廊下はますます薄暗くなり、空気は冷たく肌に張り付くようだった。どこかから、水の滴る音が聞こえる。心臓が痛いほど脈打っている。これからどこへ連れて行かれるのか、想像するだけで足が竦む。しかしセレスティアの歩調は速く、私は必死に彼女の後を追った。

やがて、一つの扉の前で彼女は立ち止まった。他の扉とは違い、木製のどこか古めかしい扉だった。彼女は扉を開け、私を中へと促す。中は、薄暗い部屋だった。部屋の中央には、天蓋付きの大きな寝台が置かれている。その上に、黒いガウンのようなものを纏った人影が、だらりと横たわっていた。魔王だ。彼は私の気配に気づくと、ゆっくりと体を起こした。薄暗がりの中で、彼の紅い瞳だけが異様なほど鮮やかに輝いている。

「入れ」

低い声が、部屋の空気を震わせた。私は背後で扉が閉まる音を聞き、逃げ場を失ったことを悟った。セレスティアは、私を置いて行ってしまったのだ。私はゆっくりと、寝台へと近づいた。心臓がうるさくて彼に聞こえてしまうのではないかと、そればかりが気になった。

「そこに座れ」

彼は寝台の端を指した。私は言われるままに、寝台の縁に浅く腰を下ろした。彼は私の顔をじっと見つめ、それからゆっくりと手を伸ばして、私の頬に触れた。彼の指先はやはり氷のように冷たかった。

「お前は、なぜ我を怖がらない？」

「……怖がって、います」

「嘘をつけ。その目は、恐怖よりも、諦めの色が強い。我に殺されることを最初から受け入れている。違うか？」

凶星だった。私は何も言い返せずただ俯いた。彼の言う通り、私

は心のどこかでこの運命を受け入れていた。いや、受け入れるしかなかった。私には抗う力も、逃げる場所も何もなかったのだから。

「面白い女だ。人間は、我の前に立つと皆一様に命乞いをする。泣き叫び、許しを請いあるいは呪詛を吐く。だが、お前はただ黙って我を見る。その、何もかもを放棄したような目で」

彼の指が、私の頬を伝い顎を捉え、上を向かせた。紅い瞳が暗闇の中で妖しく光る。その瞳に、私は吸い込まれそうになる。彼はその冷たい指先で、私の唇をなぞった。

「その目を、我に向けろ。その諦めの色を、我への欲望に変えさせてやる」

彼がゆっくりと顔を近づけてくる。私は反射的に目を閉じた。再び、あの冷たい唇が重なる。今度は昼間よりもずっと深く、貪るような口づけだった。彼の舌が私の唇を割って中へと侵入してくる。その冷たさと、強引な動きに体が震える。頭の中が痺れ、抵抗することもできず私は彼の口づけを受け入れてしまった。彼の舌が私の舌を絡め取り、吸い上げる。その度に背筋に甘い痺れが走り、腰のあたりが熱くなる。怖いはずなのに嫌なはずなのに、体の奥がじんわりと熱を帯びていくのがわかった。

彼は私の体を抱き寄せるとそのまま寝台の上へと押し倒した。柔らかなマットレスに、体が沈み込む。彼の体が私の上に覆いかぶさってくる。黒いガウンの前がはだけ、彼の白い胸元が露わになった。その光景に私は思わず目を逸らす。彼は私の顔を再び正面に向けると、その紅い瞳でじっと私の目を覗き込んだ。

「何を恥じることがある。お前は、我のものになるためにここへ来たのだろう」

その言葉に、胸の奥がチクリと痛んだ。私は彼のものになるために来たわけではない。義妹の身代わりとして、ただ、生贄にされただけだ。しかしその事実を彼に伝えたところで、何が変わるというのだろうか。私は彼のものになるしかない。そのことが、なぜか無性に悲しかった。自分の意思とは関係なく、誰かの都合でここにいる。その事実が、私の心を締め付ける。

彼は、そんな私の内心を見透かしたかのように、フッと笑った。その笑みは昼間のものよりもずっと柔らかく、どこか妖艶で私の心臓を跳ねさせる。

「だが、今のお前は、我のものだ。この体もその心も、すべて」

彼はそう囁くと、私の首筋に顔を埋めた。彼の冷たい唇が私の肌に触れる。その感触に、体がびくんと跳ねた。彼は私の首筋を鎖骨を、胸元へとゆつくりと口づけを落としていく。彼の唇が触れるたびに、そこが熱を帯び甘い痺れが全身に広がっていく。寝間着の前を寛げられ、白い肌が露わになる。彼の視線が私の体を這う。その視線だけで、肌が粟立った。

「なんと、白い肌だ。まるで雪のようだな」

彼はそう言って私の胸の膨らみに手を触れた。冷たい手のひらが、私の熱い肌に触れる。その温度差に体が震える。彼の指が、私の敏感な部分をゆつくりと、焦らすように撫で上げる。その動きは私の呼吸を乱し、体の奥から熱いものが込み上げてくるのを感じさせた。

「あ……っ」

思わず漏れた声が自分のものとは思えなかった。彼の指先が、私の体に快楽を与える。その未知の感覚に戸惑いながらも、体は正直に反応してしまう。彼の指が私の蕾を摘み、転がすように弄ぶたびに腰が浮き上がりそうになる。こんなことは、生まれて初めてだった。自分の体が自分のものではないかのように、彼の手によって勝